

「戦後 80 年という夏の日に」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 8 月 15 日は終戦記念日でした

10 歳の頃、住み慣れた東京を離れて広島に疎開したときの苦労話を、私は父から何度も聞かされながら育ちました。原爆が落ちる少し前に広島を離れ、東京に戻ることで結果として生きながらえたことも。「空腹にひたすら耐えるとか辛い思いもたくさんしたけれど、俺は戦争に生命を奪われはしなかった。それは幸せだったな」。

その同じ年。当時6歳の母も兄姉とともに東京を離れました。母の母、つまり私の祖母が家族の疎開のために、仙台から奥まったところに一足先に移動していて、そこに兄姉が合流するための移動です。とりあえず仙台に辿り着いた一行は時機を見計らい、市街地を離れて、農村部の方へと移動する予定でした。

しかし、母はある日、「少しでも早く母に会いたい」と泣きじゃくったそうです。そこで長姉はやむなく幼い母を連れ、遅い時間の汽車で移動することにしました。その日の深夜のことです。仙台の町が激しい空襲に襲われ、1300 人を超える方が命を落としたのは…。かくして母も生きながらえました。一昨年の通信に、そのことに触れたものがありますので今回付けさせていただきます。お時間のある時に読んでいただけると幸いです。

さて、『生と死は紙一重』と人は言います。生と死という対照的なものはすぐ隣り合わせにあるということです。それでも紙1枚の厚さほどの僅かな違いで結果は大きく異なります。それは自身のことに限られた話ではありません。例えば、父か母がそこで生命を落としていたら、私も私の子どもたちもこの世に存在しないということになります。生命とは連綿と続いてきた奇跡ですね。さて、8月8日の神戸新聞の記事の概要です。

神戸高校の前身、神戸一中出身の赤松圓豊さんは『六高の金ボタン』という作品を編みました。これは赤松さんの親友であり、神戸一中の同級生でもあった三浦乙彦さんについて書かれたものです。

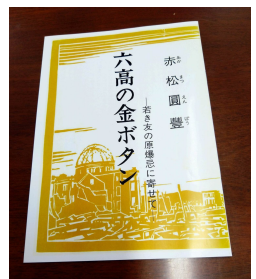
三浦さんは神戸一中を卒業したのち旧制六高（現在の岡山大）に進学しました。やがて8月。『原爆が投下された8月6日、祖父母の手伝いで三浦さんは広島にいました。その日以降、三浦さんは安否も分からず、遺体も見つかりません。後に三浦さんのお父さんが広島に入り、その姿を探したものの出会うことは叶わなかったようで数日後、「焼け野原で見つけた」という六高の制服の金ボタンだけを持ち帰ってきました』という話です。

赤松さんも当時、弔問に訪れた際にご遺族からそのお話を聞いたのですが、腑に落ちない点があったそうです。それは焼け野原に落ちていたというのに金ボタンがあまりにきれいだったことでした。そこで推論します。『被爆直後の広島の様状を目にしたお父さんは息子の死を確信したが、遺体が見つからないままでは皆が期待を持続けてしまう。そこで皆を諦めさせるために金ボタンを用意し、現地で見つかったことにしたのではないかと』。

赤松さんは「多くの人に語り継いでほしい」と、同じく神戸高校の卒業生である柳原恒久さんに生前、この『六高の金ボタン』を託しました。託された柳原さんは朗読会を開くなど思いを受け継いできましたが、この度、後輩たちにこの話を伝えたいとの思いから、このたび自分たちの母校、神戸高校に寄贈することにしました。

新聞社の方に読後の感想を尋ねられた私は「友の死を悼む同級生の思い、子どもを先に亡くした親の悲しみが伝わってきます」と答えました。今後、平和教材のひとつとして図書室に置いておきます。80 年前に皆さんの先輩がどのような時代を生き、どのようなことを考えていたかが伝われば嬉しいな、そう思います。

80 回目の終戦記念日。『戦後 80 年』とは、軍事衝突や紛争が世界のあちこちで絶えないなか、この国ではそのような争いが「80 年の長きにわたり発生しなかった」ということに他なりません。今、私たちがこうしてともに生きていることに、心から両手を合わせたい今年の夏の日です。



「アユタヤで僕が思っていたこと」

高校教育課長
新谷 浩一

○ アユタヤの空がとっても青かったのです

8月のタイは雨季。でも、宮下さんとともに国際交流事業で訪問したタイは、時に急なスコールが激しく路面を叩くものの、空は概ね青く澄んでいました。タイの学校関係者との交流が目的です。現地では多くの子ども達、先生方、教育庁の要人の方々にお出会いしました。タイの子ども達は真っ直ぐに僕目を見つめてくれます。それは昔々、どこかで出会ったことのあるような目です。



行程は5泊6日。様々な事柄に触れることができました。幾度も心を揺さぶられました。中でも僕の心をもっとも強く捉えて離さなかったのは、旧都アユタヤの寺院ワット・チャイワッタナラムで目にした、首から上をこぞって切り落とされた仏像達の群れでした。カンボジアとの戦いで勝利を記念して建立されたというクメール建築の寺院。かつては王の法事を執り行うなど、歴史と格式ある寺院との説明もありましたが、今はどこを見渡してもこの有様です。

アユタヤ自体は1350年にウートン王によって建国され、現在のタイ中南部エリア一帯に約400年ほど栄えた王朝です。チェオプラヤー川流域で繁栄を極めたことから水の都とも言われ、歴代33人の国王によって統治されてきましたが、1767年にビルマによる侵攻で滅亡しました。その傷跡は至るところに残されています。この首から上を切り落としたのも、すべてビルマ軍の所業と言います。

生きた人間の首を切り落とし、自らが殺めた証とする。それは国の内外を問わず歴史小説等で幼いときから見聞きしてきた世界です。それにしても、身体だけが残されたこれほど多くの座像を目の当たりにすると、さすがに胸が苦しくなります。戦争とは人の生命への敬意だけでなく、神への畏れも仏への畏れも奪い去ってしまうものなのですね。



1374年に建立された大寺院ワット・マハータートでは、ビルマ軍との戦いで切り落とされた仏頭を菩提樹の木が覆いながら育ち、結果として菩提樹の中に仏様の顔だけがすっかり取り込まれてしまった光景が見られます。このようになるまで仏様は何を見つめ、何を思っていたのでしょうか。その重みに僕はそのお顔をとても正面から見ることはできませんでした。

かつてこの場所で多くの人々が逃げ惑い、無念にも刃に生命を絶たれたのでしょうか。その大地を踏みしめ、大きく息を吸い込んだ僕は、生きているということにたまらなく感謝したい、そんな気持ちになりました。生は当たり前のように自分とともにあるものではないのです。



○ アユタヤで僕が思っていたこと

昭和20年、仙台空襲の直前、当時6歳の少女はそこからさらに奥まったところで待つ母のもとに疎開するため、兄姉とともに仙台の市街地にいたそうです。そのうち皆で奥地に移動する予定でしたが、少女はある日、少しでも早く母に会いたいと泣きじゃくったそうです。そこでやむなく長姉は幼い少女を連れ、遅い時間の汽車で移動することにしました。その日の深夜のことです。仙台の街が激しい炎に包まれ、1300人を超える方が命を落としたのは…。

「私がこれまで生きてこられたのは、あの時、浩ちゃんのお母さんが泣いたお蔭だからね。私はずっと感謝しているの」生前の伯母の口癖を思い出した僕は、青い空を見上げました。「恭子おばちゃんが暮らしていたタイに初めて来ました。そして、今更ですけど僕は感謝しています。『母を連れ出してくれて本当に有り難う』って。」